

平成28年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立金沢北陵高等学校

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
1 あいさつ・礼儀作法・身だしなみ・時間厳守について、職員の共通理解による時宜にかなった指導を確立し、規範意識を育む。	① 時間厳守の指導を徹底することで、遅刻・欠席者数の減少と皆出席を奨励する。また、登校指導等により挨拶の励行を推進する。	【成果指標】 学年あたり1年間の皆出席者数が A 80人以上であった B 60人以上～80人未満であった C 40人以上～60人未満であった D 40人未満であった	C 53人 1年48 2年58 3年53	季節の変わり目である時期に体調を崩したため欠席する生徒が増加した。次年度は、保健相談課や保健体育科を中心に、体調管理についての指導を強化し、健康面における自己管理ができるよう意識付けを図る。
		【努力指標】（生徒）（保護者）（教員） 自ら進んでの挨拶が A よくできている B だいたいできている C あまりできていない D ほとんどできていない	A+Bの平均=88% 前期91% 後期84%	やや元気に欠ける挨拶が一部見受けられるものの、自ら進んで立ち止まって挨拶をする生徒が前年度76%より10%以上増加した。今後も生徒・教職員が一体となって、挨拶運動に継続的に取り組む。
	② 服装容儀の指導を徹底し、生徒の規律・マナーの向上を目指す。	【満足度指標】（生徒）（保護者）（教員） 北陵生は頭髪・服装容儀やマナーなどについて A よく守っている B だいたい守っている C あまり守っていない D ほとんど守っていない	A+Bの平均=90% 前期91% 後期88%	頭髪に関しては学年と生徒指導課の十分な連携により指導が行き届き、大半の生徒が守っていた。しかし、服装容儀・マナーについては一部守られていない面もある。今後、担任・学年・各課の連携により規範意識を高める指導を一層強化したい。
	③ 生徒の行動に注意を払い、生徒の面接や保護者との連絡をより密にし、学校組織として生徒理解を深める。	【満足度指標】（生徒）（保護者） 本校での学校生活に満足していると回答する割合が A 90%以上 B 85%以上90%未満 C 80%以上85%未満 D 80%未満	生徒 72% D 保護者 93% A	生徒と保護者の満足度に明らかな乖離が見られるものの昨年度の生徒62%から10%以上向上している。保護者は各学年とも90%以上であるが、生徒は各学年とも80%未満である。「修学旅行」や「インターンシップ」など特有の行事があるにも関わらず低い原因を究明する。生徒との面談を通して、どのような点を改善すればよいか探していきたい。
学校関係者評価委員会の評価	挨拶・服装容儀・マナーについて生徒たちは概ねよく努力しており、しっかりできている。地域や職場において見かける生徒や卒業生の姿も良好である。学校生活に対する生徒の満足度が低いのは、教師の評価がやや厳しいことのためではないか。生徒一人ひとりの悩みに丁寧に向き合うことにより満足度は向上するのではないか。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善策	・挨拶は人間関係作りの基本である。今後もどのような場所においても教員と生徒が立ち止まってきちんと挨拶できるよう指導するとともに、教師の側から率先して挨拶するなど根気強く継続的に取り組んでいく。 ・生徒の些細な変化に気づくよう学校生活のあらゆる場面において声かけを行い、実態把握に努め生徒理解を深める。併せて、学校行事の精選や校務の効率化に努め、生徒と触れ合う時間を確保する。			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
2 ICT機器の活用や協働学習などを通して授業改善に努め、主体的・能動的な学びへと変革し、基礎学力の定着と学習意欲の向上を図る。	① 研究授業や公開授業を積極的に行い、授業改善に努める。	【努力指標】（教員） 授業では生徒の発言や活動を増やす授業の工夫に A 積極的に取り組んだ B ある程度満足できる取り組みができた C 積極的な取り組みはできなかった D ほとんど取り組めなかった	A + Bの平均 = 67% 前期 65% 後期 69%	全教員が研究授業を実施し、アクティブ・ラーニングを意識した授業改善に取り組んできた。次年度は、より意識的に協働学習を取り入れるとともに、教科横断的な校内研修会を一層充実させる。
	② わかる授業を行うとともに、生徒の興味・関心を引き出す授業の工夫・改善に努める。	【努力指標】（教員） ICT機器の効果的な活用に努めている教員の割合が A 80%以上である B 70%以上～80%未満である C 60%以上～70%未満である D 60%未満である	D 58% 前期 54% 後期 61%	授業の導入部分においての利用効果が高いことから、今年度は、ICT機器を利用しての授業に抵抗なく取り組む教員が増加した。次年度は、アクティブ・ラーニングを推進することと併せて、ICT機器の効果的な活用法についてipadなどを含めた研修に取り組む。
	③ 家庭での学習習慣の定着を図る。	【成果指標】（生徒） 家庭での平均学習時間が A 90分以上である B 60分以上～90分未満である C 45分以上～60分未満である D 45分未満である	A + Bの合計 = 79%	昨年度より学習時間は1日平均20分は増加している。今年度は定期試験前の家庭学習時間は増加したものの、日常的な家庭学習時間は依然として不十分である。また、個人差が大きいことも課題の1つである。授業の予習・復習を徹底させるため、適切な質と量の課題を与え、家庭での学習習慣を定着させる必要がある。
学校関係者評価委員会の評価	ICTの活用について、教師間ではばらつきが見られる。機材や設備を充実させ、より使用しやすい環境にしないと数字は伸びないのではないかと。教材作りは教師に負荷がかかる分効果は大きく、ICTの効果的な活用について十分な研修をすべきである。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	<ul style="list-style-type: none"> ・アクティブ・ラーニングの手法やICT機器の活用について、相互参観授業、研究授業等において、担当教科だけでなく他教科の授業を積極的に参観することなどにより研修する機会を増やす。 ・授業の予習・復習を徹底させるための適切な質と量の課題を与え、堤出についての指導を徹底して、家庭での学習を促し、学習時間の増加を図る。 			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
<p>3 組織的なキャリア教育と面談によりガイダンス機能を充実させ、生徒が高い目標を持ち、自らの能力や適性を発見して進路の実現を図る。</p>	<p>① 各学年に応じた進路学習を工夫し、主体的で継続的な学びができるように支援する。</p>	<p>【努力指標】（教員） 担任と生徒との1年間の個人面談回数が A 8回以上 B 6回以上 C 5回以上 D 5回未満</p>	<p>B 6回</p>	<p>面談がクラス全員を一巡するには2週間程度の時間を要するため、各担任は時間や場所を工夫しながら行っている。本校生徒の多様な志望進路に対応するため、回数よりも面談内容の充実にも努める場合もある。次年度は、合格できる学校・企業でなく、本当に行きたい第一志望の学校・企業に合格できるよう、よりきめの細かい面談に努める。</p>
		<p>【満足度指標】（生徒） 進路行事・「産業社会と人間」・「総合的な学習の時間」の学習が進路を考える上で A 大いに役立った B ある程度役立った C あまり役立たなかった D まったく役立たなかった</p>	<p>A+Bの平均=86% 前期88% 後期84%</p>	<p>進路選択の参考となる情報や体験を交えた活動を行うことにより、将来について深く考え、そのために何をすべきかが理解できていると判断する。特に1年次の「産業社会と人間」は重要な役割を担い、系統的な進路ガイダンスを行いながら、上級学年へと繋げる科目である。2年次の夏季休業中における3日間のインターンシップも働くことの意義を十分認識できる取り組みであった。次年度も継続し生徒個々の進路意欲を高めたい。</p>
		<p>【成果指標】（生徒） 四年制大志望者のうち第1志望校に合格した生徒が A 90%以上 B 80%以上90%未満 C 70%以上80%未満 D 70%未満 就職希望者が A 10月末で100%内定を達成 B 11月末で100%内定を達成 C 12月末で100%内定を達成 D 12月末で100%内定に達していない</p>	<p>☆四大第一志望 C 77% ※就職希望者 A 100%</p>	<p>当初第一志望の私大から国公立大学への受験を勧めるなど、四年制大学を志望する生徒には高い目標をもたせるようにした。次年度も合格できる大学でなく本当に行きたい、より高次の目標に向かえるよう指導し、努力させたい。 就職では、2年次より早期の意識付けと学習指導を行い、各自の適性に合う事業所を選択できるようにしたい。</p>
	<p>② 各種資格、検定試験に取り組む機会を設け挑戦する意欲を喚起する。</p>	<p>【成果指標】（生徒） 新たに資格・検定を取得・合格した生徒の延べ人数が A 1000人以上であった B 900人以上～1000人未満であった C 800人以上～900人未満であった D 800人未満であった</p>	<p>A 1033人</p>	<p>昨年度（760人）より大幅に増加した。工業や商業分野に加え、漢字検定や英語検定を1年次に学年全体で取り組んだことがその増加につながった。生徒の志望進路実現に向けて、資格や検定の取得に対する取り組みを通して、何事にも粘り強く努力する姿勢を養いたい。</p>
	<p>③ 保護者や関係機関と連携を深め、進路指導の充実を図る。</p>	<p>【満足度指標】（保護者） 提供された情報に対して A 満足できた B ある程度満足できた C あまり満足できなかった D 満足できなかった</p>	<p>A+Bの平均=88% 前期86% 後期90%</p>	<p>昨年度（84%）より増加した。学年通信の配付やホームページの内容を充実させ進路指導に関する情報をわかりやすく提供することにより多くの保護者の理解を得ることができた。今後も保護者からの質問や意見にも迅速に対応できる環境を整備しながら生徒の進路実現を目指す。</p>
<p>学校関係者評価委員会の評価</p>	<p>国公立大学への進学者が増えているのは良いことである。今後は、第一志望の企業に就職する生徒が増加するよう指導してほしい。</p>			
<p>学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針</p>	<p>・当初第一志望の私大から国公立大学への受験を勧めるなど、高い目標をもたせるよう指導する。合格できる大学でなく本当に行きたい、より高次の目標に向かえるよう努力させる。就職では、2年次より早期の意識付けと学習指導を行い、各自の適性に合う事業所を選択できるように指導する。 ・学年通信やホームページにより、本校の教育活動や進路指導に関する情報をわかりやすく提供することにより多くの保護者の理解を得ることができた。今後も保護者からの質問や意見にも迅速に対応できる環境を整備しながら生徒の進路実現を目指す。</p>			

重点目標	具体的取組	達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
4 部活動や学校行事、地域貢献活動を通して、よりよい人間関係の構築と活力ある学校生活の充実を図る。	① 部活動の活性化を目指し支援・運営する。	【成果指標】（生徒） 部活動への加入率が A 90%以上である B 85%以上～90%未満である C 80%以上～85%未満である D 80%未満である	A 93% 前期91% 後期95%	加入率は昨年度と特に変化はない。2年次生の加入率が他年次生の加入率と比べ、やや低い。次年度も1年次生に部活動に取り組む意義を説き、原則加入を勧めたい。
		【成果指標】（生徒） 部活動に対し満足感・達成感を感じている生徒の割合が A 90%以上である B 80%以上～90%未満である C 70%以上～80%未満である D 70%未満である	D 68% 前期69% 後期67%	生徒は概ね、部活動に対して前向きな姿勢で取り組んでいる。しかし、対外試合等の成績面において、一層の成果が求められる。運動部、文化部ともに生徒同士が切磋琢磨できるよう練習環境や活動内容の工夫を図り、より満足感・充実感を持てるようにする。
	② 地域行事・学校行事等に参加し、地域との連携を密にする。	【成果指標】（生徒） 休日も含めて年1回以上参加した生徒が A 500人以上であった B 450人以上～500人未満であった C 400人以上～450人未満であった D 400人未満であった	A 579人 (100%)	生徒会やJRC部を中心に、積極的な地域への参加が見られた。今年度は金沢マラソンのボランティアに部活動に加入していない生徒が数多く参加するなど、ボランティア活動を行う生徒の幅を広げることができた。次年度も、地域行事への参加を積極的に奨励する。
学校関係者評価委員会の評価	部活動に90%の生徒が加入していることは高く評価できるが、実際の参加率や活動状況について詳しく調べた上で、部活動に対する満足度を評価すべきである。部活動に外部指導者を入れて活性化させることも必要である。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・部活動の顧問は「第2の担任」であることを強く意識し、個々の生徒の活動の様子をよりしっかりと把握する必要がある。運動部、文化部ともに生徒同士が切磋琢磨できるよう練習環境や活動内容の工夫を図り、より満足感・充実感を持てるようにする。			